

26. 治療に難渋した肺アスペルギルス症の1例

杉山 玲, 黒田文伸 (千大)

症例は60歳男性。平成6年に胃癌のため前院にて胃全摘を施行され、以後肺気腫・両肺尖部肺嚢胞のため同院に通院していた。平成11年12月より発熱が出現。平成12年4月非定型抗酸菌症 (*M. kansasii*) と診断され、内服治療により解熱し排菌は停止した。平成13年7月再び発熱し、炎症反応と左肺尖部の嚢胞壁の肥厚を認めたため前院入院となった。8月抗アスペルギルス抗体陽性でアスペルギルス症と診断され、イトラコナゾール200mg内服開始されたが改善せず、当院転院となった。喀痰より *A. fumigatus* を検出した。9月イトラコナゾール400mgに増量、アンホテリシンBの吸入・点滴を試みるも改善しなかった。10月アンホテリシンBの点滴に加え、経皮的に空洞内注入を行い、5-FC、ウリナスタチンを併用したところ嚢胞壁は菲薄化し炎症反応は改善した。

27. 胸腔内腫瘍で来院した胸腔内髄膜瘤の1例

大山雅代, 徳田敦子, 中村祐之
多部田弘士 (船橋市医療センター)
野本靖史, 木下孔明 (同・呼吸器外科)
上原敏敬 (同・病理)

平成13年の住民検診で左肺尖部の巨大な腫瘍影 (9 cm) を指摘され来院された33歳女性。Von Recklinghausen 病に合併した側弯症・胸腔内髄膜瘤 (当時 5 cm) にて他院で椎体固定術の既往があった。画像的に嚢胞と脊髄腔との交通を認め、また嚢胞穿刺で髄液成分に一致した液体を採取した。腫瘍が8年の経過で増大傾向にあったため、当院呼吸器外科で髄膜瘤切除術を施行された。画像的に興味ある症例と考え報告する。

28. 短期間で急速に増大した胸腺嚢胞の1例 (63歳 男性)

寺田二郎, 中野邦夫, 三崎太郎
大山邦雄 (東京専売)
野守裕明 (済生会中央・外科)

〔診断名〕胸腺嚢胞〔主訴〕胸部圧迫感〔現病歴〕2000年4月より高尿酸血症、痛風、にて当院外来通院中であった。2001年4月13日、14日胸部圧迫感が出現したため近医受診するもnp。4月24日当科外来受診。chest X-Pにて7 cm大の腫瘍陰影を認めたため、同日精査加療目的で入院となる。胸部CT、胸部MRI、心エコーなどの精査で胸腺嚢胞が疑われた。入院後の胸部X-Pにて腫瘍の増大傾向を認めたため治療、確定診断目的にて5月8日胸腔鏡下腫瘍摘出術を施行した。

2000年4月の胸部X-Pでは特に異常を認めず、短期間に増大したと思われる臨床経過が胸腺嚢胞としては非常にまれなものと思われたためここに報告する。

29. 肋骨に骨形成性腫瘍を呈し長期間観察された多発性骨髄腫の1例

村田研吾, 堀江美正, 小南聡志
富田和宏, 中村秀範 (聖隷浜松)

60歳男性。1993年より健診にて胸部異常影を指摘されていたが放置。2000年6月、健診胸部異常影にて当科紹介受診したが、生検などの精査の同意が得られず、その後来院しなかった。本年5月、胸壁の腫瘍の増大を自覚し、当科受診。精査目的にて入院となった。右第8肋骨に石灰化を伴う巨大な腫瘍と、前胸部に石灰化のない腫瘍を認めた。病理所見では異型性のある形質細胞を認め、血液よりM蛋白が、尿よりBence-Jones蛋白が証明されたことから多発性骨髄腫と診断した。骨形成性病変を示し、長期間の経過を追えたまれな症例として報告する。

30. 肺血栓塞栓症で発症し、片麻痺を呈した多発性骨髄腫の1剖検例

河野正和, 松尾直樹, 大滝雅之
藤田 明 (都立府中)

症例は65歳男性。65歳時に肺血栓塞栓症と診断され、抗凝固療法を受けていたが一時中断後、呼吸困難を訴え救急を受診。入院後、呼吸状態は一時的に改善するも約3週後に意識障害・左片麻痺出現した。その後、呼吸不全も進行し死亡された。赤血球連鎖形成の存在から高血液粘度症候群を、また血中のM蛋白の存在から多発性骨髄腫が疑われた。脳血栓症の合併から非細菌性心内膜炎も考えられた。剖検で1) IgG型多発性骨髄腫 2) 肺動脈主幹に至る肺血栓塞栓症・肺梗塞 3) 心臓弁膜の硝子化・血栓付着を認める非細菌性心内膜炎と診断された。若干の文献的考察を報告する。

31. 原発巣不明癌に合併し治療に難渋した急性肺血栓塞栓症の1例

中村 純, 浅香佳子 (千大)

症例は66歳女性。平成13年5月2日、突然の呼吸困難にて近医入院。一時意識消失および心停止となるも心肺蘇生にて回復。ECG上の右心系負荷所見等より急性肺血栓塞栓症が疑われ、精査加療目的にて5月11日当科入院となった。

造影CTにて肺動脈および両側大腿静脈内に血栓を認め、腹腔リンパ節の腫大と下大静脈の圧排像も認められた。頸部リンパ節の吸引細胞診にて腺癌の診断を